

Fate/Grand Order ～思案の海に流されて～

十握剣

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、作者が課金し過ぎたせいでほしいサーヴァントが手に入らないなら二次小説で我慢すりゃあいいじゃないという逆転の発想の勢いで書いたもの。

サーヴァントたちに色々とさせる二次小説です。

サーヴァントたち同士たちでドッジボールさせたり、旅行いかせたり、ゲームさせたりと、FGOのキャラたちを好き放題やっていくものです！

目次

それは思い付きから始まる

1

それは思い付きから始まる

それは、いきなりのことだった。

この世界観を壊しかねない大暴挙がそこに踊り出た。

「英霊たちがドッジボールやったらどうなるかな？」

それは何気ない、ふと思った言葉だった。

数多の大英雄をサーヴァントにしたマスターのふとした考え。ふとした嗜好。

それがこんなことになるなんて、と。

※

「さあ！ 始めましたいきなりの英霊ドッジボール大会！ 我らがマスターが暇な思い付きで始まった大変面白い異聞！^{アンソロジー} 解説は皆が銀種をぶつけてきても笑顔でマナプリズムと交換する稀代の大天才にして絶世の美女！ レオナルド・ダ・ヴィンチちゃんだー！！」
「ウワー！ とウキウキ気分でそう実況する稀代の大天才に視線を向けるのは、断わることが苦手な善良な眼鏡っ娘のマシユ・キリエライトだった。」

「ど、どうしてこんなこと？」

「さあ？ 藤丸くんが提案した案件みたいなんだけどね、ダ・ヴィンチちゃんは愉悦^{たのし}そうなら喜んで手伝いをする心優しいお姉さんなのだよ」

「それが混沌^{カオス}な状態になったとしてもですか!？」

たものだ。バーサーカーのサイズもぴったりじゃないか」

「■■■■■■!!」

エミヤも巨体であるヘラクレスの体に合う運動着まで準備していたマスターに軽く戦慄を覚えている頃、なぜこのメンバーなのか気になった。それをマスターに聞いてみると、

「なんでかこのチームでやってみたかった」

という。理由はそれだけだと聞かされた時は酷く驚いたエミヤ。

「まさか貴公と並んで戦うことになるうとは……なんとも奇妙なことですね」

「それもまたマスターがくれた不思議な縁よ。断わる理由もなかった訳だし、共に戦うとしよう、セイバー」

「ええ。尋常に戦いましょう、アサシン」

アルトリアと小次郎が意気揚々に領き合っていたり、クー・フリーンは長袖運動着をマントのようになびかせてやる気を出しながらマスターに聞いた。

「それでマスター。俺らの相手は誰なんだ？ ドッジボールでも本気でやるぜ？」

「その言葉を待ってたよ！ ランサー！」

そう答えたのは、愉悦なマスターの双子の妹である赤髪が特徴的な少女が悠然と疾走してきた。

「そう！ 我らのマスターの双子の妹である立香りつかが元気よく入場!!

兄が兄なら妹も妹だあ！ 兄のふざけた提案に一番に悪ノリしたのは何を隠そうこのリツカだあ！」

「だあああああああ!!」

驚くことなかれ、主人公は二人で一人なのだ。しかし、マスター権ははつきりと兄・藤丸の手の甲に『令呪』が浮き上がっているが、多くのサーヴァントはこの立香にもマスターに似たような雰囲気オーラに当てられ、大抵の言う事は聞く。良く出来た環境システムである。

「英霊同士のドッジボール大いに興味がある！ さあ！ 私のサーヴァントたちよ！ 敵を屠るのだ！」

藤丸の妹・立香の不穏な言葉に冷や汗を流すが、更に流すことにな

る。

「青は消え去るべき、男は黒に染まるのだ」

「くだらない……くだらな過ぎるぞ」

「……なんでも良い、破壊できるならなあ」

「フハハハ、私が私と戦えるとはなあ」

「ウフフフ、私も私と戦えるが来るなんて思いもしませんでした♡」

「なんで私なの？ えっ？ 小次郎なら武蔵でしょって？……それ逆じゃない？」

「私なんて同じアルゴ船に乗っていたただけだというのに来させられたのだぞ。……ヘラクレスと戦えとか言わないよな、マスター？」

クラスが別々だというのに、関連性のあるサーヴァントで固めてきた立香に本気度が窺える。

青セイバーを睨む黒セイバー（同：アルトリア）と、エミヤの反転^{オルタ}が銃を見せびらかし、クー・フリーン・オルタは凶悪な甲殻を軋ませ、髪から無数の蛇を靡かせるゴルゴーン、ウキウキと可愛らしく微笑む^{リリイ}姫なメディア、なんで呼ばれた女剣士・新免武蔵守藤原玄信^{みはやもとむぎさし}、同じ国と同じ乗船者というだけの繋がり、浚面のアテランテが並び立っていた。

当然、女性陣はブルマ姿である。そして、敵陣営に誰よりも衝撃を受けたであろう人物は気を失いそうに倒れそうになっていた。

「……し、しっかりなさい！ あなただけが衝撃を受けているわけではないのですよ!？」

「いやあ、でも一番の衝撃を受けたのはコイツだろうぜ！ わはははは！」

「クっ！ ク、ククク……ほ、ほれ、しゃんと立つが良い魔女よ」

「■■■■■■■■■■！」

「マスター……これは余りにも酷だぞ。自分の若かりし日の、しかも誰よりもあのブルマ^{かっこう}が似合う者に対し、この魔女の年齢を考えるにだな……」

気絶しそうになったメディア（魔女）は、メディア（姫）を見て血の気を失せ、メドゥーサがそれを支え、小次郎とヘラクレスも支えて

ダルクと天草四郎時貞が側につき、空を飛べるイシュタルがボールを落とす役割にされていた。ジャンヌは『皆で楽しく遊んで親交を深めるから』という理由で誘い、四郎は『愉悦が見られるぞ』と誘い、イシュタルには『どちらかに勝つか賭け事をして、どちらか勝つても美味いところ持って行ってOK権』をといてもので釣り上げた。

「みなさん、楽しく遊びましょう」

「ええ、皆さん、愉しく遊びましょう」

「ジャンヌの横にいるもう一人のルーラーの言葉なんか引つかかった！」

クー・フリーンがそう叫ぶ隙に、イシュタルは『?』の目になったまま始まりの許可もなく、ボールを地に落とすとした。

今、七騎対七騎の激闘が、始まった。